

# 文化

## 花と子どももの 画家

いわさきちひろ

生誕100年

1963年、いわさきちひろはソ連(現ロシア)で開催された世界婦人会議に日本代表団の一人として参加する。戦後すぐからの親友で、童心社編集長の稲庭桂子も一緒だった。画家として参加したちひろは、ひたすらスケッチをした。古都レニングラード(現サンクトペテルブルク)の石畳の街並みは、アンデルセンの「絵のない絵本」の世界を想起させ、ちひろは稲庭

### 「若い人の絵本」

松本 猛 18

## 子どもの本と異なる世界

に「どうしてもこの本(の絵)を描きたい」と言った。帰国後、稲庭は腹心の編集者、渡辺泰子と共に企画を考える。渡辺は60年に坪田譲治の文とちひろの絵で大ヒットし、童心社



「絵のない絵本」32夜より「最後の夜の囚人」  
1966年(ちひろ美術館所蔵)

の基盤を築いた「あいうえおのほん」の編集者だった。しかし、幼児図書専門の同社にとつて、人生の苦悩や社会の矛盾を描いた短編集「絵のない絵本」の出版は難しかった。

3年後の66年、ちひろは稲庭と渡辺にデンマークまでアンデルセンの取材に行くこと告げてヨーロッパ旅行に出掛ける。渡辺は悩んだ末に女子学生が手に取りたくなるような若い人向けの絵本企画を考え出し、「絵のない絵本」の出版が決まった。ヨーロッパパスケッチがふんだんに生かされた、鉛筆線が美しいモノクロームの絵本は成功し、ちひろは毎年、若い人のための絵本を描くようになる。

2作目は稲庭の思い入れが深い、広島で被爆した子どもたちの作文や詩を集めた「わたしがちいさかったときに」。3作目はロシア革命の前に自由主義を掲げて蜂起し捕らえられた青年将校の妻たちの物語「愛かぎりなく」。これはちひろや稲庭や渡辺の若き日の思いが重なった本だった。さらに宮沢賢治の「花の童話集」、ちひろと渡辺が青春時代に夢中になった「万葉のうた」、ちひろの好きな樋口一葉の「たけくらべ」と続いた。「若い人の絵本」はちひろと稲庭と渡辺の思いが詰まった本だった。このシリーズでちひろは子ども本とは違う世界を描いた。この絵はその象徴的作品の一つである。

(美術評論家)  
〈土曜日に掲載します〉